

2章 旭 台 遺 跡

1節 位 置 と 環 境

旭台遺跡は、鶴来の西方約7kmにある火釜から南へ約1kmの能美郡辰口町旭台地内に位置する。ここへの交通機関は、北陸鉄道能美線や北鉄バスがある。能美線「火釜」駅を下車し、丘陵を縫う道を南へ約1.5km（徒歩約20分）進んだ地点の西側の丘陵鞍部に遺跡がある。

この遺跡は能美丘陵のほぼ中央にあり、海拔約100m、平野部との比高約40mの侵食高位海岸段丘面（洪積世中期）を形成する台地の西側斜面下に立地している。能美地区の他の縄文遺跡が平野部に面しているのに比べて、山間部に位置し、小高い丘に囲まれている。遺物包含層は黒色有機土壌で、その範囲は狭い。ここから縄文時代の多数の土器片、石鏃、石斧、磨石、敲石、凹石および多数の剥片が発見されたが、調査が表面採集に限られたため住居址は確認されていない。

当遺跡は、発見当時既に果樹園造成のための整地が行なわれ、破壊が進行していたが、遺跡発見届により現在は一時中止の形をとっている。しかしながら、遺跡の周囲には立入禁止の札が立てられ、柵がはりめぐされており、完全破壊の危険にさらされたまま放置されている。

2節 遺 物

(1) 土 器

採集した土器は細片が多く、量も多くないので、細かな分類は不可能であると思われる、一応次のように大別した。

I 類—縄文を主体としたもの・

II 類—条痕文を主体としたもの

III 類—その他突帯文・刺突文など、地文として縄文・条痕文を施さないものでIII類には便宜的にこの類に入れたものもある

IV類—底部

この分類にしたがって以下概述したい。

a I 類（拓本1—47）

1—3は前期に特徴的な羽状縄文であり、4・5もそれと推定される。1は黒褐色の外反した胴部片で、焼成は堅密。3は口縁。6・8・27は縄文地に突帯が付くもので、6には口縁近くに半円形の断面を持つ突帯が付く。口縁および突帯上に施文は見られない。27には縦に突帯が施されている。7・9・16・17・18は共に斜縄文地の口縁であり、口端部には縄文の施文は見られない。21・24・25などは縄文原体を回転させずに押捺したものである。37・39には複節斜縄文が施され、39はこれを切って沈線が走っている。40—43は独特な縄文原体を使い、節は極めて細かい。44—46はあまり類を見ない口縁である。44は沈線の下に縄文が施されたもの。45は口端が内向している。46は横方向に条痕状の調整が見られる。47はやや堅密な赤褐色の土器で、沈線を施したのち細かい縄文を施している。

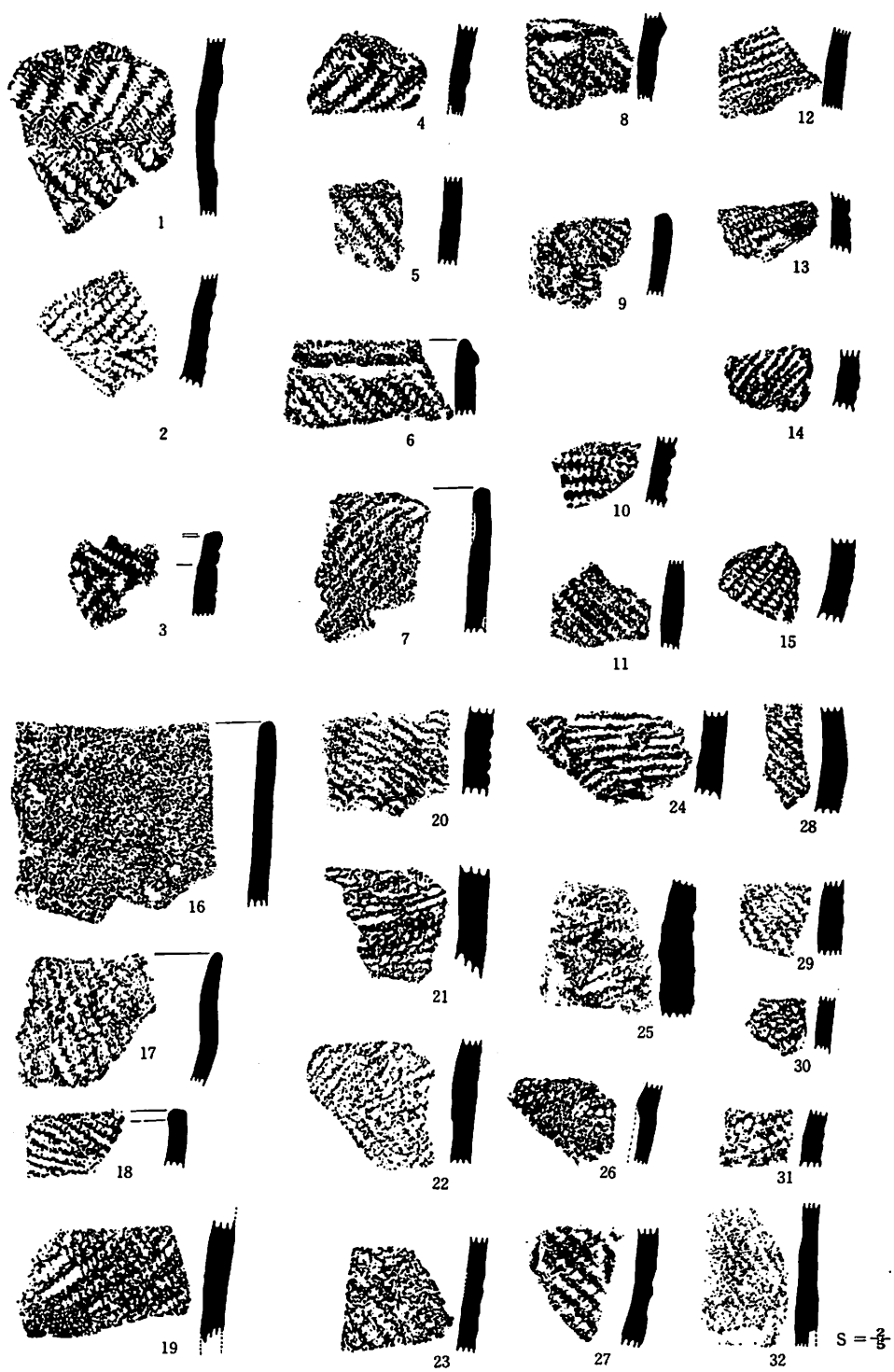


图1 I 類 土 器

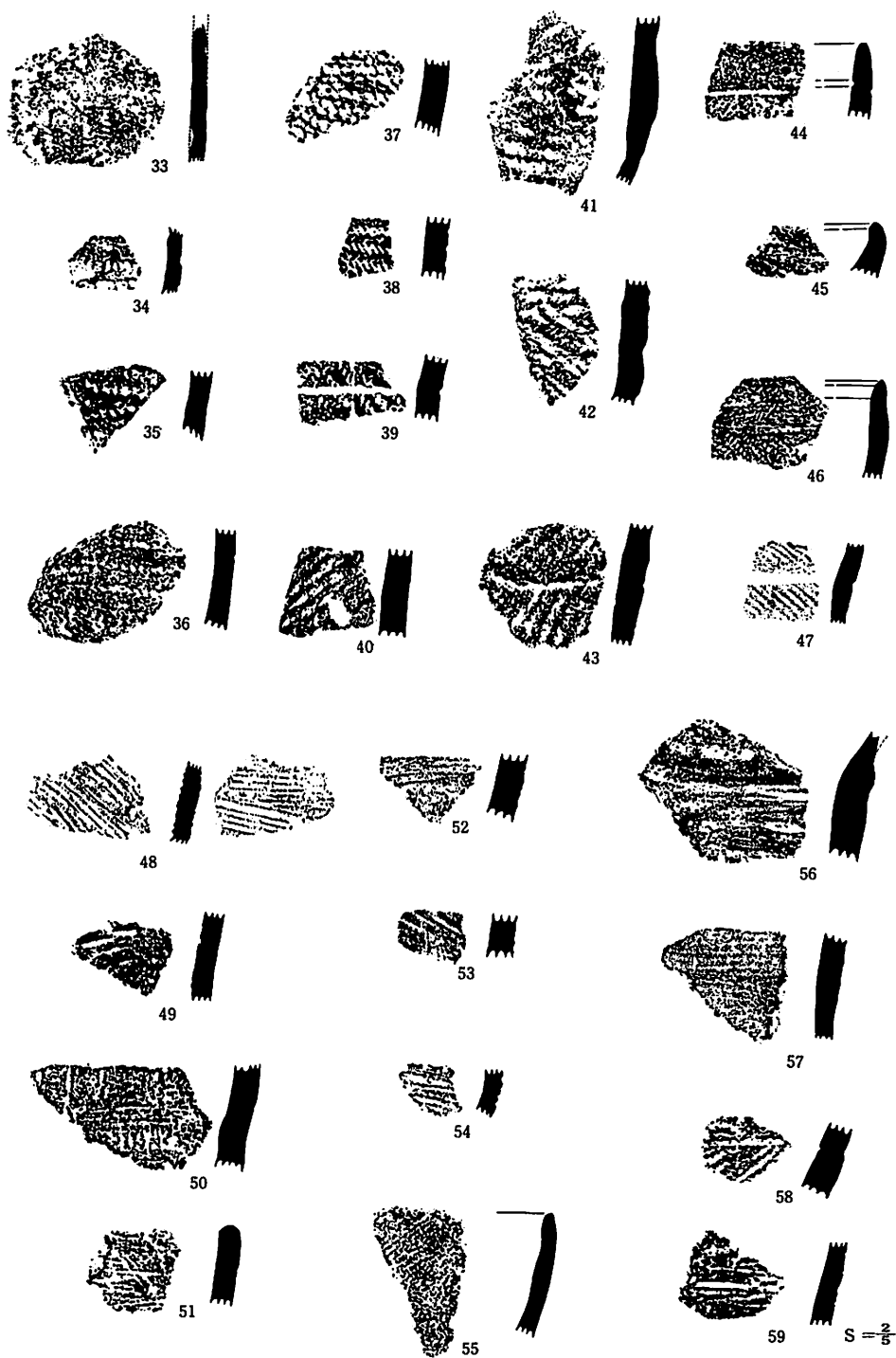


图2 I, II 类土器

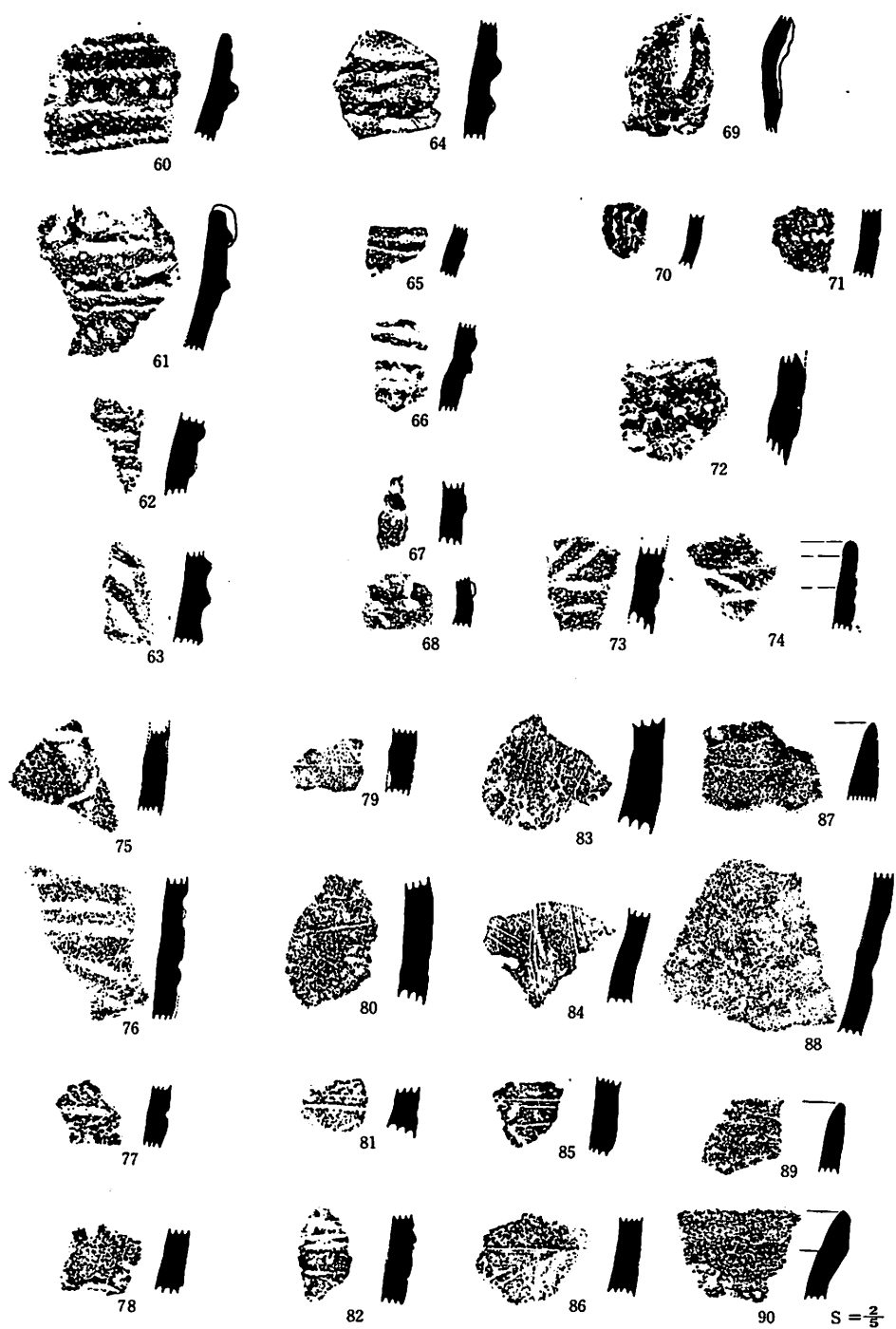


图3 III 類土器

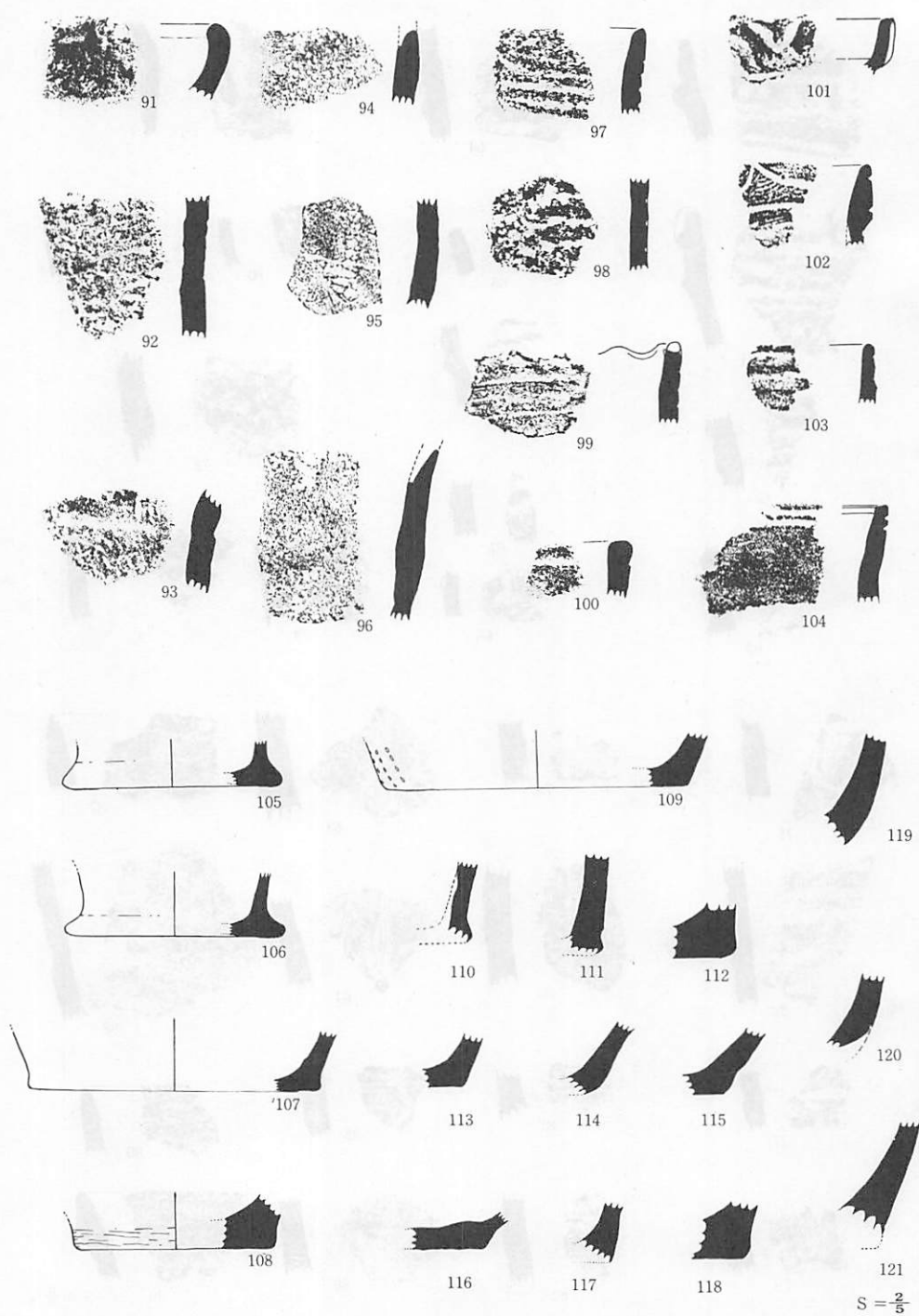


图4 III類土器・底部

b II類 (拓本 48—59)

48・49 は内外面に二枚貝の腹縁で条痕を施している。内外面条痕はこの2点のみである。50・51 は格子目状に条痕を施し、装飾的要素を加味している。52—55・57 は外面のみに条痕を施したもの。55 は口縁。57 は条痕が横方向に走っている。56 は他に類を見ない厚手の土器で、条痕文に含めるのは必ずしも妥当ではないが、横方向に粗雑な調整を施したものである。58・59 の条痕はやや太く、条線文に分類すべきものかもしれない。

c III類 (拓本 60—104)

60—66 は突帯文の土器である。60 は口縁からやや下がった部分に太い突帯が付き、突帯上には押捺が施され、胴部を押捺縄文がめぐっている。61 は口縁に平行に断面が三角形である上下2本の突帯がめぐり、さらに口縁に直角に突帯が施されている。色は灰褐色を呈し、焼きは固い。63 は断面が三角形をした突帯を持ち、曲線を描いている。64 は2本の突帯の上に斜方向に縄文の押捺が見られる。65 は細い突帯上に刺突が見られる。67—69 は浮文が施されたものである。67・68 は円形の浮文。69 は棒状の浮文が施され、口縁付近と思われる。70 は採集された唯一の爪形文である。72 は先の尖った施文具による列点文。73・74 は綾杉状の沈線が施されたもの。74 はあるいは刺突によるものかもしれない。75 は沈線で曲線を描いたもの。時期が下る可能性がある。76—78 はいずれも横方向の沈線。79—86 は無地に条線が施されたものである。87—96 は無文の土器であり、87・89—91 は口縁で、91 はあまり類を見ない型式である。95 には若干縄文が付いている。99—104 は型式不明の口縁を集めた。99 は口縁を指頭で押捺し、波状にしたもの。外面に微隆起が見られる。100 は外側が丸い口縁の下に段がついたもの。101 は口縁に鋸歯状の隆帯がめぐっているもの。102 は口縁下端を沈線で区画し、内に細かな縄文を施したもので、時期は下るかもしれない。103 は薄手で、口縁下の外面に微隆起が見られる。104 は口縁部付近に半載竹管により2条の沈線がめぐっている。時期は下るであろう。

d IV類 (105—121)

底部土器片は17片採集された。このうち尖底および丸底になると思われるものは見られない。105・106 は特徴的な張出しを持ち、若干上げ底になる。107・110 も弱い張出しを持っている。他は一般的な平底である。116 は底部裏面に縄文が施されている。

(2) 石 器 類

本遺跡の採集資料は、石器類および剥片、未製品が土器類に比べて極めて多いことが指摘される。

a 磨製石斧 (実測図—1—3)

1・3 は変成を受けた緑色凝灰岩製。2 は片麻岩製である。1 は断面がだ円形で刃部が欠損した棒状石斧で、側面の稜は弱く、柄の着装部は自然面を残している。2 は短柵形の石斧で、片方の面は凹凸が激しく、自然面と変わらない。3 は撥形の石斧。石斧は一般に定式化されていない感がある。

b 石鏃 (実測図 10—14)

10・11 は柳葉形の石鏃。10 は暗紅色の頁岩質で剥片を粗雑に整形したもので、両面に剝離面を残している。11 は黒色安山岩質。12 は黒曜石質で、逆りをもち、縄文時代前期以降に一般に見られるものである。13 は白色の頁岩質で尖部および着装部を欠いているが、丁寧に剝離を施した優品で、古い様相を呈している。14 は赤褐色凝灰岩質の粗雑な石鏃で、

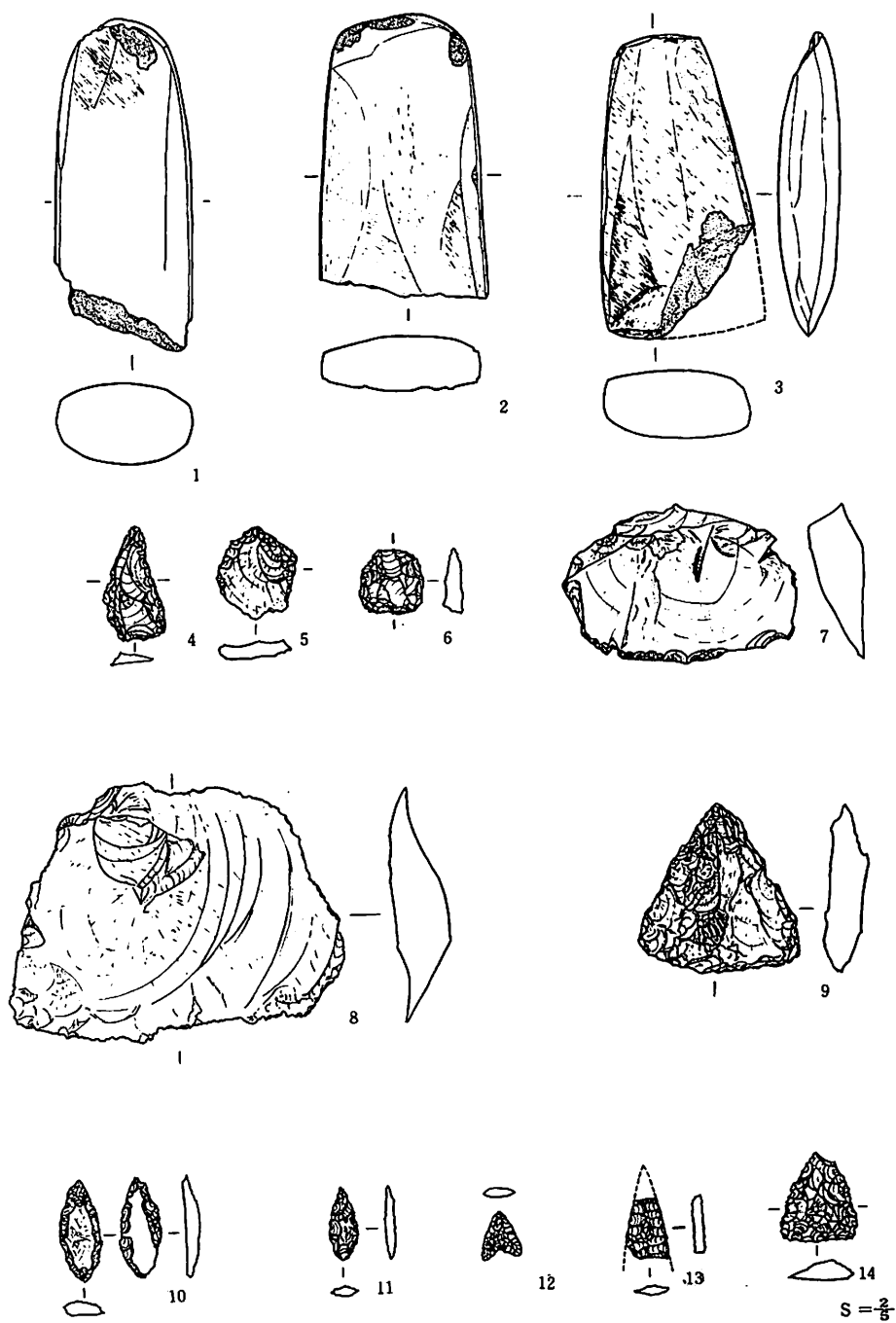


图5 石 器 類

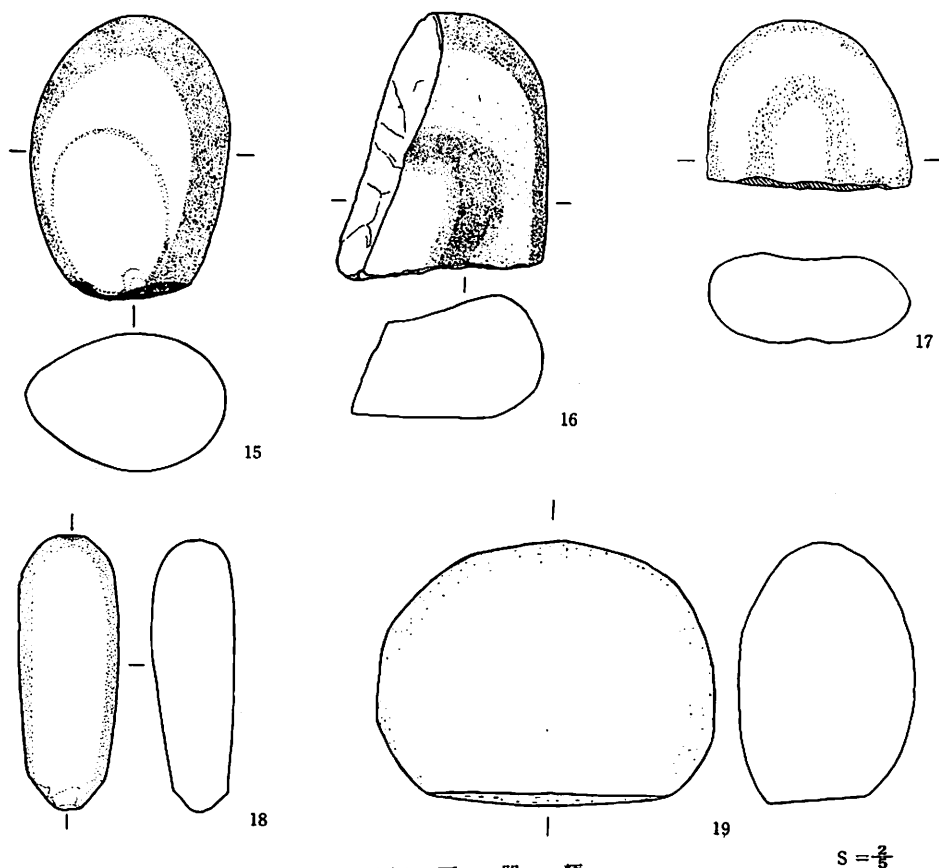


図6 石 器 類

やや大型である。

このうち10・11・13および14は12よりも古い型式の石鏃と考えられよう。

c 敲石（実測図15）

硅質頁岩質。長軸の一方を敲打に用いている。

d 石皿（実測図16）

砂岩質で平坦面的一方が摩滅して凹んでいる。

e 凹石（実測図17）

両面が凹んでいる。

f 磨石（実測図19）

石英粗面岩質で、だ円形の長軸に沿って摩滅している。

g その他（実測図4—9, 18）

4は黒色安山岩質の剥片。一部を加工している可能性がある。5は白色凝灰岩の剥片に剝離を施した一種のスクレーパーと思われる。6は白色頁岩質で、表裏両面とも細かく剝離を施したスクレーパー状石器。7は比較的大きな剥片を加工して刃部をつけたもので、青灰色の安山岩質。8は大型の剥片であるが、一種のスクレーパーの未製品かもしれない。9は明らかに加工を施し三角形状になった石鏃、あるいはスクレーパーの未製品である。18は棒状の用途不明の石器で、両端部を打ち欠いている。

3節 若干の考察

土器については、若干の時期的振幅があり、一概に時期を決めるのは困難であるが、羽状縄文・条痕文が見られるので、前期、しかも爪形文が盛んに用いられた北白川下層式以前に相当する時期を与えても大過はないと思われる。

突帯を施したもののうち、60—66は花積下層式の系統を引くものであり、張出しを持った底部は本型式の特徴である。また、円形の浮文、棒状の浮文は、早期末～前期初頭に位置づけられる佐波・小寺遺跡出土土器に共通している。内外面を条痕文で調整した48も縄文時代前期前葉の特徴であり、格子目状に条痕を施した50などは佐波・小寺遺跡に類例がある。したがって、佐波・小寺遺跡と様相的に一点を共有していることは疑いない。しかし、前述の両遺跡、およびそれに続くと考えられる柴山潟底貝塚に一般的な口縁端部の施文がまったく見られないこと、および底部に尖底や丸底がなく、基本的に平底で統一されていることは、時期が若干下降する要因となる。

土器の特徴は、沈線や条線を施したものや無文が多いことで、他の縄文時代前期の遺跡とやや異なっている。また型式不明の口縁が多く、これらの点に関しては今後の研究課題としておきたい。

先に、石器および剥片が多量に採集されたことを指摘した。このうち、石斧および石鏃12・敲石・凹石・磨石は、土器の年代観に相当する遺物としてまちがいないが、石鏃のうち、柳葉形のものおよび13のごときものは古相を呈し、佐波・小寺遺跡には既に遺存していない型式であり、不定形なスクレーパー類なども縄文時代前期にはあまり見られないものである。これらの点より、上記の石器類は多量の剥片とともに、土器の示す年代観よりも遡上する可能性が強い。

したがって、採集土器のうちで、あるいは前期を遡るものがあることも十分考えられ、図示していない土器の細片をも含めて今後検討したい。

参 考 文 献

- 1) 橋本澄夫 「石川県佐波遺跡の研究」石川考古学会誌11号
- 2) 四柳嘉章他 「甲・小寺遺跡」石川県穴水町文化財保護専門委員会
- 3) 富山県教育委員会 「極楽寺遺跡調査報告書」
- 4) 沼田啓太郎他 「柴山潟底縄文貝塚の調査」小松市立博物館

なお、本章作成にあたっては、沼田啓太郎氏、吉岡康暢氏、および上野佳也氏に御協力を受け、また石質鑑定にあたっては、藤則夫氏の御教示を得ている。記して感謝の意を表したい。